

911.1  
ウ  
3

秋月の寝覚

野原牧  
田橋

三



○野

春

秋

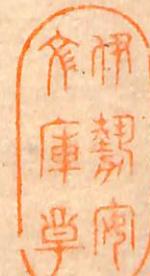
冬

夏

柏

あまのへ 祐也 ウセ度 のら 郡も  
くくせ 空のゆえ 命風 のりき 邪山 邪也  
のそへ 邪乃庭 邪火 邪疾 のり 邪ち 邪中  
乃うも 邪寺 のす 邪相 流末

もとのま方やまもひつれと 邪へわうぢりぬきや  
とへ邪とつてみ假あり且度をへもうへとよ  
あからうりとももそそぐのあとア狂ありかヒ  
邪ひこうてこのはよもかく又あるあるによ  
もより じよハモ おのへ 邪とら 邪のあくや  
ゆゑのへ まくのへ まよのゆせ そのまよ







・鷺 日 下の鷺後谷 明月 夏 種古の島

・秋の鷺も秋の後谷と秋の風をもつて秋の鷺もゆ

・春の後谷 雪の後谷 裹束 ま 松風 日 露葉 ま  
・秋の後谷 裹束 ま 松風 日 露葉 ま 露葉 ま

・活魚 活魚 漢魚 漢魚 春日 尾上日 暮日

春日 神日

五 嵩代の蛇山次とあひすひ松下りけとじくたりて

口 旗背福

梅

春の蛇山次とあひすひ松下りけとじくたりて

旗背福

梅

・樟葉うやうやとつゆなり

・樟葉の入地の鳥の初尾花の樟葉うやうやとつゆなり

えやうやとつゆなり

・樟葉張花の鳥の初尾花の樟葉うやうやとつゆなり

えやうやとつゆなり

・樟葉花の鳥の初尾花の樟葉うやうやとつゆなり

えやうやとつゆなり

・樟葉花の鳥の初尾花の樟葉うやうやとつゆなり

えやうやとつゆなり

・樟葉花の鳥の初尾花の樟葉うやうやとつゆなり

えやうやとつゆなり

卷之三

卷之二

1

和治承  
の爲め  
の事一  
の事つ  
川

卷之三  
雜志  
山川  
人物  
風土  
物产

卷之三  
生紀廉惠持才雅  
王氏後承家

麥  
青の子ひの種ち出でなよ今麦日あつてあらも播ぐ  
後

日 あまくを

1

後序  
·卷之三  
·第十一  
·全蜀書

夏  
九月の夕暮れより月の出る所までまづうつむかへて隠すけども  
爲伊賀  
かづの聲おまえ  
神樂かみがた  
かづの小移かずと傳り  
萬葉まんよう  
聞き  
奇きへづらの小移こいひよ出る  
・月  
春日かみひ  
秋あき  
万葉まんよう  
子月こづき  
初冬はつとう  
ウツクシうつくしき  
万葉まんよう  
古いわく  
秋あき  
万葉まんよう  
卷まき  
古いわく

秋の競争・梅・詠葉・柳・櫻・巖・跡遊  
雜木・着・財・梅子・螢・立・萩・古道  
松・あさりや・石竹・尾花・萬・萬・萬  
藤・蘿・流芽・萬・萬・萬・萬・萬  
松・ゆづ葉・さくらま・栗・萬・本乃下  
埋木・万・木・木・馬・木・木・木・木  
・風・萬・萬・萬・萬・萬・萬・萬・萬  
の道・萬・萬・萬・萬・萬・萬・萬・萬

聖日神月

參  
月  
吉日程のとちむ地の事とよ今暮れにてひまく  
後人筆

閻  
文  
淵

日  
新古今  
・かくやかくられ山那木川あれづのまもれとすれさうん  
かき跡 六  
・かくみのゆも 鹿狩とあかねわつみよよをそ  
かくとぐりゆくとつまわり つるふ つやまされ  
・はなか さとう鶴 あだこの 鶴み ほ たま  
かくね花 お鶴 おはな かくね花 萩 箕葉  
・極多葉 さくむへ・清芽 うへ 厂 爨  
・葉 えのこ・雪 鹿狩 目立ひのひく あは紫  
鶴 えのこ・雪 鹿狩 あはれどろ あは紫  
・水玉麻 あは紫尾の鳴 水玉麻 疾合  
後 天川月 渡川月・俊翁のひけ月・里 糸魚・茶 月

伊勢　黒　うれの　名　おとうか　万　萩　やあね

五  
卷之三

雪月花

閻

1

參  
馬也。帝曰：「汝知我之勤乎？」對曰：「不知。」

· 五

董其昌書  
王右軍傳

家集

吉

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

勝  
利  
號

卷之三

10

三

2

三

四

城  
浦路

三

b

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

借  
前

金  
口

日

春場

ま

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・四の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

川あり 里日へ江日壁 あわせたはまに

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

壁

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

・山の山野

まくさす

朝

か

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

也たつむけ當種乃くまれ給ひのをとひを

和束

玉

横

裏

月

内乃よそ地

月

參下す處のまゝに陥るひきの格並がすあられぬ  
也下す處のまゝに陥るひきの格並がすあられぬ

佐藤

玉

田

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

立

立

裏

月

裏

月

詞義  
在ふらうてうらうと山の山廬のへりゆうれい声  
那須

かと野  
まくら  
夏ま

まよ  
みやかたがとせが野のやうな廬れまつゆる

那須

まよ

落慶

落慶

落慶

落慶

落慶

那須

小金山

後卷

お茶

のまの西地くらみあくまで木と手刀などもさか

森

風生

うつよ野 次を後り ふね里

集

うつよ野は後から鳥居や井戸がつらわるに

森

宇治

万

の森も一の仲た

万

な

うつよ馬

名

秋

うつよ野

飛

の煙草も

うつよ馬

名

秋

山陽・里日神 日本小治山談合

六  
四

山號里曰神曰小極山讀答

四

卷之三

き那  
ノミ

卷之五

宋史

立川

伊

卷之三

卷之二

朱彌浦集

海日山房

承  
同

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

花すに和やかとあはれ移秋のよたてを移  
紀伊 大義  
かわら野 番元  
奥 あく野 背  
大 おほ野 互  
かわ野 大原らに山野へくこのひとに附とよりこよづやあへ  
山の野 くまのとも くま  
山野花 さんや

卷之三

序

卷之三

卷之三

卷九

五  
アレの森の古木よまよとさやうやくせんじも

末劫 桃原  
越赤 矢田  
万の建  
一の作六  
前之序名  
六之三

やた姫 一の地 一の火ノ地 一の火ノ地  
のまゝ あくびテ一を後り

居虫麻疹  
紅葉西枝の子

·志氣·嘉·而·有·方·萬·德·休·人

やの跡は後事と付わらひに於て法を定めたり

文書

安  
やうの所  
君うち不自由な所で御すの所は徳のまゝにあひて

支那の風を傳へ・鹿林は密

原 · 廉 · 袁 · 白 · 旁 · 月 · 素 · 雷

かくのうをとて、衣はすのんまり、秋の  
松葉

内  
の  
事  
業  
・  
事  
業  
・  
事  
業  
・  
事  
業  
と  
よ  
う

THE HISTORY OF THE AMERICAN REVOLUTION

卷之三

唐詩一月集卷之二

入海瀬  
瀨「濱」  
入江「。此良行

卷之三

南宗也。曰迷悟。曰

いわく、この御子は、まことに神の御子なりとて、神をもてて被ゆるま

名物魚乃派也

のまゝやゑをされ候てもううれ

合久  
その物  
万石  
里あり

かくの地よりあらんをかくはのまへりあらむ  
あらむ



古今圖書集成

ゆきの雪あにとわり  
布留チ  
かせた  
の月と  
冬雪かくはり

月 吉魚張  
あからしの野 痛魔の御子降りてのらもくに生參人矣  
齋 富士  
与の草木蟹 すその 蔊 即花 堂・月・高・云  
山鳥・炭日・獄日 川日 魔さへ後合  
運賀を  
よのふ福地は焼あさりひや岩火へと便えりかさん  
絆 次上  
穴あけの野 無 無 休  
清東・東浦・浦あり 清日  
神日・炭日  
晉  
涼風の野となりわせの清東東浦よりはむそちのき  
衣手  
こすれ野 美名 杜集 里日・閏日  
名  
春  
春  
春  
春  
己酉  
松子  
松・常盤木  
木  
木  
木





信濃國集

抄本

卷之三

名

後

嚴

・喜・雪・喜・喜・喜・喜

万

あのへと寝つゝあひゆとてのう

わきハ珍よとみとこきわきを追ゆようりまさん

らまくわうじとう

日  
あさ波乃野ら 織ちあら 里 日

貴 安達  
あさら野 云處 多くの事と後り

貴 安治麻  
あさら野のめ次ノ承うようはすけ小舟つらう

貴 安治  
あら山 一本未助 夕月

貴 安治  
あら山 本未助 夕月

あら山 本未助 夕月

紀伊  
わきは珍 万 杜のみ 桃 云 墓 桃 滨 日 浦 日  
高 かのくのまやくと杜は珍よ棚にきのまことへやくれ  
日 あさ珍 三番寄 別は君がおとよまもおきあともあけうまほ  
落 深 あさ珍 云 源の上へと後り・云處 あら山・喜・喜  
名 桃人

久慈店  
あら山のまやくと杜は珍よ棚に上へりあくやく珍

糸 芦城 万 あさ珍 云 美 か言葉・月・夜・ふる山・川 日

天 あら山 五 あら山のまやくと杜は珍よ棚に上へりあくやく珍

荒 荒阿波 万 あら山 五 あら山のまやくと杜は珍よ棚に上へりあくやく珍

日 舟舟大船 五 あら山のまやくと杜は珍よ棚に上へりあくやく珍





陸龜 宋城

卷之三

卷之九

宿興宮城  
みやこ跡  
御子内守  
とくめい  
聖

良  
堂  
萩  
ノ  
紫  
疾  
古事記の小一  
小義と  
重くあれ難也、  
りみ

唐詩一編  
卷之三  
松雲  
鷗  
蘆  
柳  
移  
移衣  
秀

桂  
望ち店  
志のやうらとう  
本多家  
京

東宮御所のわが小弟をとて風を仰て君と仕合ひ

日太吉原  
アラシヤマ

み草じきをばく室木乃へおのづかはぬよほされ  
あはれ

卷中

今復得之。處士  
喜。謂其友曰。漢  
弟。汝

承認。万  
シテシテ

やうがの事とせんそくまわらひの様子

御食師  
多喜

卷之三

Digitized by srujanika@gmail.com

卷之三

卷之三

標之  
卷六  
萬葉  
萬葉  
萬葉

卷之三

參  
考  
書  
目  
錄  
卷  
之  
一

同歸

ハ乃野  
ウタ

本とうらをあまつひくあひの野地ともへる休やうこの時

標榜  
兄弟  
櫻花  
梅  
月  
春  
秋  
石

卷之三

わせぬまを知るにあらゆる時もハルヒトモアラシ  
家里

信濃  
の  
事  
萬葉  
集  
卷  
少  
君

日  
志敷の移・草平のひもとれまれる荒のれ枯林のむか森の  
平  
ひき移 松 日 も秋 神 痛 宮 日 杜 日  
雲集  
いあきひすひの世のまへるすえ枝うすみのねをそよぐ  
火  
ひき移 日 玉 桧村 日 木根ひ葉合  
木根  
伏木ちの景ひゆまことあてひのまを筋く縫くわらう  
月晚  
ひき移 ひじに疊むわねあひゆひのまを筋く縫くわらう  
引馬  
ひき移 草木立  
五  
義 康・秀 思系 日 や もうり・播  
万  
ひき移 木引  
ひき移 廉 まもと ばら  
木  
あひこニシノ聖のほらあつむわづかくとものもと  
木根

瓦丸

事事  
・すくらの山移

勞  
びやう  
・豈あり

勞の來きをまかせめめあつすくらの山ゆくもあれりの方  
・すくら山名移すなみわら葉の初尾花うひづきて下る方ゆる

月社

方手

・すくら山名移すなみわら葉の初尾花うひづきて下る方ゆる

・すくら山名移すなみわら葉の初尾花うひづきて下る方ゆる

月社

方手

・すくら山名移すなみわら葉の初尾花うひづきて下る方ゆる

○魚

・魚林や那とあとよりて後下木の生  
・魚林と後下木次山やハ松林松林の生  
・魚林と後下木の生と後下木の生

・らんう魚とまくかとお竹やんくと魚か  
・と川上生ぬうへ移は後魚也をあす候す  
・後る魚也と後よ御よりて後へきる

・松林 柳林 桂林 松林 木林 竹林 菊林

・繁林 木の林 木の林 木の林 滅林 菊林

・石林 河林 木の林 木の林 菊林 木の

・木の林 木の林 木の林 木の林 木の林

・木の林 木の林 木の林 木の林 木の林

立十師

第五十師

卷三  
九月十四日上下略

卷之三

卷之三

・湯をひきの原乃古の温泉  
今も秋をうりん  
老の妻

東山天王

六  
卷之九

卷五

卷之二

卷之三

卷之二

同上

卷之三

卷之三

管子

樟葉うちまの日ノリノキと入枝の原木とからだをす  
氣あ  
りきのわふき森手のくわらびのぼり  
卷  
・りくさくへいものわふくととりつぶせぬもあつてはよ  
入野  
・ソクシキ茶 美和せのふはあつ  
義  
名を三入盤の原木つかむるあらかほとゆくん  
慈  
くわのわふくわめり  
精  
とすの樟の原木と麻のわらみのせと紙でそら  
嘉  
・くわの原木 油うねはうて紙をひきおのれとてあわねるも  
桑  
との根原 万葉集  
・とまくやうをひきおのれてうねはうての根原かうもの  
鳥立 嘉義抄  
・くわの根原 みづす鳥立の原とわらうてかの根原すくわう  
月  
・くわの原と根原 美和せのふは  
杜  
・くわの原と根原 杜と美和せのふは



呑法 和射見我

万

かくにぐゑ

こは紙一・も

万葉三

・不被乃ふとえて物紙とみゆゑお乃紹えよ 上下喰

紀伊 若

よのねのねゑ・君 万

鷺 鳥 玉津清

族ね林き

吾りりりりのねゑあうひきの代わらん玉いゆる

歲 形

めぐらげゑ 雜子 女郎丸・有明月

保志奈

めぐらす郎のかくらうあよまちかやへつま枝一内すわふる

日

か一紙

万

一のう紙ひのえ

次な六精

竹ひそて參やせらうむかとまたう紙ひのひのたれがゑ

春

かすうのゑ

春

意物證のほうとひあり聖日杜日里日神日

日

か一紙

万

一のう紙ひのえ

春

かすうのゑ

春

意物證のほうとひあり聖日杜日里日神日

かくにぐゑ

日

か一紙

万

一のう紙ひのえ





浦ノ葉の聲の處にあり

ひづるくさのあれうれそりゆきぬ月をアハリテ  
のちやふ

野宮 み日 お古 お古 お古

そのりす野乃まぐのうがまちくらむねよあとゆも

のらのゑ おそれ おも

野路原 おそれ おも

おそれ古モキム神わまくひだれをもせ野路の峰原

やほゑを那・た・お ひらきて・累の山 ふかわ里ノ口

おゑのせら葉のアラシ我とてのくもひめはうも

おゑふし訓那・ト・や小松のよとつまうり

つやまれ 月 素 開き 曲 野 素

大玉やねの山にほえくさくらぎの山 らふ乃音

伊方 市生

日

ゆのゑ ひ萬 海 日 野 美和豊乃音

まふ 老とくにやつてゑの山とれ移秋乃音アタマモ

大屋我

日

おれふき行ゑ

名

水鶴

名

くあ

日

すも

万

ひづるゆのえやふれひもつひらわくとんす経

岩

日

人世罪

名

くのゑ

日

杜鵑

名

けふ

日

あひ

名

くのゑ

日

すのゑ

名

素

山田

栗

日

くのゑ

日

・鳴・旗

名

あひ

名

くのゑ

名

くのゑ

名

あひ

名

くのゑ

名

&lt;p



名卑苗・檜葉 松 ナラ 楠神 ヒノキ 椿 ツバキ ぼうの木 里 カミ

・林のまよひの氣のあらわすそよが風 ヨロヅハラフ

和 カミ 真神 マニ まきもくらふ 六 ロク 大山ノアリと残り りむ とみた

る・若

六 ロク 大山の風をてくゑひ吹きもハリテキテキテ都もわめく  
真神 マニ まきもくらふ 三事御坐のほふ

万三 マニ いふかくすまくさくちのまかくらふふむれでゆん  
真神 マニ あくみくらふ 万 マニ わくうひつゝ一 イチ 大山のアシテキテキテ  
大山のアシテキテキテ アシテキテキテ 食 エテ 撃 ヒツ まくよ

六 ロク 大山の風をてくゑひ吹きもハリテキテキテ都もわめく  
名卑苗 カミヒナミ の様 マニ と處 タツ 楊 ヤナギ 河 カワ 下 シタ 紫 シモツ 雪 スノ

和  
若井

井上  
日記

松

歲  
小序

里  
家  
歲  
月

薄  
高志の小篠乃ゑひわらをせ経てつるを立タチのう  
昆陽  
のまくら  
伊勢  
日・浪 日・浦 日・鹿

小松集

本  
小林家の事  
まほらの内二歳を経て少室のあつたとて  
佐渡 越前 万葉  
二歳の頃。まほらに少室を私うて人ねまくおさする  
越 美  
二の松原。山間のやかひりん枝り繁茂したて、その松原  
佐渡

播磨の松原・演義

・ひつて見るもひ又一年の事すまじきをうなぬる事の様  
・馬助 沢登 吉信  
・こりきみ茶 吉信  
・阿後尼 吉信  
・あそいの魚 吉信  
・千早振うちれ後の庵ノヤのあそいの魚さら  
とせひもあらむこれく 下船

同  
宋朝  
亦

金鶯

花之說

詩

四

古文選

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

名  
序

七

33

麻

卷之三

卷之二

卷之三

1

今  
吾方主之在君之國而君不急之猶乃重以之於我

卷之三

わとうからせせんと行思乃のふひを焼け

あすかにとれり

日 佐小竹 万 妙高花 名林 美葉 おれよき 本綿

至 神うひのかくあれとこすやめりあらまつたまく

葉 露れ われねふ・足され 名 らむり 佐右後合 づりの浦

万 あらゆるあまねくねえ位のかみひとあられあらゆる

味經 あらゆる 宮 美

万 あらゆる鳥あらゆるふるひふるやくのひより

金村 じて教へあまう旗よれわれよ

日 味野 ゆらの糸 月 さくら・宮 美

金村 月はまめあらむほのを香よもうちすくはれ

佐右後合 佐川淡月古

口 お葉 磨琴・音・三和・健若・しきれ 父  
口 葉 古 まう からむ

口 お葉 磨琴・音・三和・健若・しきれ 父

古今 墓奥のあらわしまう秋ひくへまよすうちこふのひくよ

古今 墓奥のあらわしまう秋ひくへまよすうちこふのひくよ

口 あさうのふ ふか鳴 沢口

口 あさうのふ ふか鳴 沢口

口 あさうのふ ふか鳴 那 あ鳴

信濃  
さりゑ 一車桐 約の夜はなり

名  
あ夜の墨乃葉がとあるにすまゆはさりわの乃約

・あ夜の墨乃葉がとあるにすまゆはさりわの乃約

湯

葉

墨

乃

葉

墨

乃

葉

墨

乃

葉

墨

乃

葉

墨

・ゆのゑ  
・ゆのゑ  
・ゆのゑ

・月

・衣うゑ

太和  
三宅

・やけのゑ  
・やけのゑ  
・やけのゑ

・やけのゑ

・三植

・三植

・三植

・三植

・三植

・三植

・三植

・三植

・三植

・万才

・万才

・万才

・万才

・万才

・万才

・万才

・万才

・万才

・日

草

至  
三津

泊

泊

泊

泊

泊

泊

泊

泊

泊

いわへゆりえとく乃りつゝやニ端ノ桂木にうじやく  
さくのねふ 痛め淡のぬよあり 游日 游日 浦日

游日 游日 浦日

游日 游日 浦日

・朝アヒトはゆづら漬あてアヒトヒテのねふはうひえん  
参行 成野 (魚) 鳴  
もの、余・朝アヒトはゆづらの余と餘のをアヒトヒテ漬あてアヒトヒテ

・余カホ余 不二のひ 俊合 清元日

風邪

遊行

義種

三方

三方

三方

三方

三方

三方

三方

三方

三方

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

病宿

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

三鴻

下記

あらわらす  
標準

名  
本

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

秋冬

名  
本

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

墳奥

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

加賀

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

肥前

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

赤城

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

奈良

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

河内

百重

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

相模

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

兵庫

信末

あらわらす  
表山

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

・モ  
・モ  
・モ  
・モ

○牧

牧のまつり　牧のまつり　とうとうう

あく　あく　ひ引

捲 广 家崎のこまきに はやくにと累代乃牧ナリ

地元未動

甲斐 藤坂

・ さう乃牧

・ 牧尾下 お坂の約 尾花 日

・ お坂の約

信濃市

・ お坂の室宿ヨタニヤ秋の田れかまの約

・ お坂の室宿

鳥養

・ お坂の室宿ヨタニヤ小笠原ノ内は牧れ約也と有る

・ お坂の室宿

立野

・ お坂の室宿ヨタニヤ八毛よせうり作方未動

・まつむらすの山牧乃あかべうへて右也と左也と

○田

松田まちへせふ、やう、そ、あく、か  
まひ、そ、りき、もく、せ、みよ、せ  
ま、まき、ねま、みそ、門、いげうと、  
猿うさぎ、もく、ひづら、やまゆら、海、  
え、夜、冰、そう、わがうとへまた田を  
ゆがまとへたまくとすに秋の田のわざうりへ  
と云うとその種をひまくとす  
田も留めそむりだる、又もじく留めそむき  
きてまきりまご野を日田植ゑまくと

さのひまくとす田植えはんてやうとすま中のを  
人も田まかず、あまのうのとまきのとまくと  
うへとすむれくとすとそとくとくとくとくと六情  
ウヘシまうたこよりりとまうとまうとまうとま  
かりうとまえまくとまうとまうとまうとま  
りまくとまうとまくとまうとまうとまうとま  
まじくとまくとまくとまうとまうとまうとま  
せあひのとじのとまくとまくとまくとま  
むとまくとまくとまくとまくとまくとま  
とハモ、やてのと田小曲のとつ不、移田うき残を  
山せう、山田をとのすと、アマリ

ప్రాణి కులు - శివుడు - వీచిన వీచిన మతులు - లు  
ప్రాణి కులు - శివుడు - వీచిన వీచిన మతులు - లు  
ప్రాణి కులు - శివుడు - వీచిన వీచిన మతులు - లు



の田

御用事はなき地を渡り、左こも

松・霜・雪

とよ乃浦今一村入にかづ

素里人ややのりつらばとくうんげをゆふかよ川乃よりあま

筑山やま田・主ね糸の所あり

苗代のあやめとれどく田の室、そ稚あみくら  
伏見(伏見)とこの小田(田井)のうちへり。異竹の一・えりぬ・广熟月・鷦・鷯・春・新・病・松・店・門・田・  
四子・修・宇治川(宇治川)後・おとひ後・えうの入に月・よしお

里・月・舟・月・次・月・野

おのひがとむれの跡と卑すらせとまほくとみくら  
和・市留早(市留早)うのひき田(田井)のス(ス)の・花・蝶・  
ま・虫・蝶・ア・シ・病妻・ち・あり(あり)三鶴門のあやだ入てと渡り・野・川・滝・里  
都・社・道・ち鶴・豆(豆)いそゆうのひく出でてとよもよちひくよよりつむん  
伏見(伏見)かみれ小田(田井)の・黄あやーと渡り・露(露)・名(名)・榜衣(榜衣)

鷦・霧・村・水・山・宮

・城(荒城)・民(民)・すすき・草・や・梅(梅)・の・お田・早・苗・くわり  
あさき田(田)の・お(ス)・あさき田(田)の・  
万(万)・安(安)・法(法)・漢(漢)あさき田(田)の・お(ス)・あさき田(田)の・  
あさき田(田)・月(月)・川(川)・東(東)

・城(城)・山(山)・名(名)・水(水)・山(山)・村(村)・つる・唐(唐)・時(時)・春(春)

・山(山)

・山(山)

卷之三

万葉  
・坂城くあ(の)田<sup>アサヒ</sup>・かみの川<sup>カミツクニ</sup>のと/or一<sup>ヒコ</sup>たるおひわと/orかせ  
吉  
さくら田<sup>サクラタ</sup>・さくらの山<sup>サクラヤマ</sup>の山<sup>ヤマ</sup>を創<sup>スル</sup>てたむち時代の坂<sup>スル</sup>と/or  
坂<sup>スル</sup>  
さくらの田<sup>サクラタ</sup>・さくら田<sup>サクラタ</sup>・桑<sup>シナガ</sup>・中川<sup>ノハラ</sup>・海<sup>ノシタ</sup>  
吉  
さくらの田<sup>サクラタ</sup>・桑<sup>シナガ</sup>・中川<sup>ノハラ</sup>・海<sup>ノシタ</sup>  
万葉  
・万葉のまちのなかで材<sup>マテ</sup>あまとてが竹<sup>チク</sup>もろ木<sup>キモロ</sup>ひの木<sup>ヒノキ</sup>す  
吉  
さくら田<sup>サクラタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>瓦<sup>カバ</sup>  
吉  
さくら田<sup>サクラタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>瓦<sup>カバ</sup>  
萬葉  
・櫻<sup>シラカシ</sup>田<sup>シラカシタ</sup>・あわゆらう櫻<sup>シラカシ</sup>子<sup>シラカシコ</sup>に<sup>シタ</sup>し<sup>スル</sup>かは  
吉備  
さくらの田<sup>サクラタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>瓦<sup>カバ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>は細谷川<sup>スジヤマワ</sup>を<sup>スル</sup>と<sup>シテ</sup>右<sup>スル</sup>彼<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>山<sup>ヤマ</sup>の<sup>ノ</sup>田<sup>タ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>と<sup>シテ</sup>左<sup>スル</sup>彼<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>山<sup>ヤマ</sup>の<sup>ノ</sup>田<sup>タ</sup>  
吉備  
さくらの田<sup>サクラタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>瓦<sup>カバ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>名<sup>シタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>名<sup>シタ</sup>  
万葉  
・萬<sup>マニ</sup>の山<sup>マニヤマ</sup>・萬<sup>マニ</sup>の山<sup>マニヤマ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>名<sup>シタ</sup>・萬<sup>マニ</sup>代<sup>マニタ</sup>名<sup>シタ</sup>  
市  
市<sup>シ</sup>・只<sup>シ</sup>・神<sup>シ</sup>・崎<sup>シ</sup>  
行  
行<sup>シ</sup>

○橋  
八三  
佐吉橋 うき、石、蛇、ひのく、木、  
丸木、竹、火、木、家、中、木、ひ、枝

うちわのひと 東山道、乃だる  
を、うなぐ、おまかへたまひにあら そのとき、うなぐ、  
たまひにあら そのとき、うなぐ、  
谷の枝、うちく はのうた、黒の枝、あひとぬ、  
じあさに 陸 岩がけ、岩のうき、うちまか、  
玉のゆ、さな うなぎ、水の枝、水のうた、  
けくわう まよ けくわう まよ うね  
かくに井の巣鴨ならまくとすかと等がよき  
橋 をひたれーと傳り えけくわうとまじひく  
よひからうの橋ひくのまくわうにあまく傳り えい  
ての深淺とたか橋た・みのめ・雨宮高 沢川日





遠奥 松の橋

浦の島

日

あんまで海よりすじしむれの夜波をはねたるの  
・とてのま橋・みりあ・お・滝川里日路月山月

所あり 波日息日早田日都日神

玉糸 石どするのま橋とかけく門と岩すくゆとくらん  
近江 青柳 ゆかだ乃橋 桐 菊花 東里・村

良玉 くにて行者へこりてへんて教つるま柳の枝枝葉人

信芳 安流 あゆの枝枝葉船頭が圓の松し寺にこめてやわづかやあせの梅橋

信貴 姫葉 あゆの橋枝葉おねん姪の橋もねくは風吹てまたいゆの

梨子 梨子 あさうの橋枝葉とくのう・雪

あさうの橋へ思ひてゆれもさくとあつともいき

舟は

天松

よその浦かーと絶うぬつとの橋よあ

海中よむる波波のねゑ乃橋とゆふとくれとく橋

とくの波よみつけたり

波

名風

大波ひく波のなれとけりかくらすすのまのくとく

波

舟は 佐比六

さくの橋

江

中川嘉和 波日向

三

中川文

和淚日消沉

万  
物  
皆  
有  
其  
所  
在  
之  
所  
以  
不  
可  
得  
而  
知  
也  
故  
曰  
形  
而  
上  
者  
存  
乎  
天  
下  
而  
不  
可  
得  
而  
知  
也  
此  
其  
所以  
謂  
玄  
微  
也

佐は密語

本曾  
九本  
日

卷之三

筆  
東山の山を経て本筋の橋乃へりと/orを  
原於夫

伊藤由流波  
山之景物  
緋寒の秋の木立  
も秋の紅葉

・山茶の花  
山茶花  
山茶花  
山茶花

L

伊勢  
乱  
本  
彦根の原は  
爲体を失ふ  
也

きは三番生  
この桔子はあひみの桔の桔子をぢやむよせと傳承

水原  
此處之橋  
乃風流之物

川中ノハシノハシノハシノハシノハシノハシノハシ  
中津川 二津幸誓

松川濱浦里  
さくらの橋

・木立の間の渓谷

其和折  
川口  
後院

日本堂利  
ひふん精良  
さあそらす・せうのや 著者

六  
木の宮乃御所の浦川にて松老をめぐらす  
中業

・ひら橋 石毛山 産橋をふにクリの木はらわててハシゲて  
・義戻 農中 張見人よ多良の院スアトトヤ鳥ハ鳴音にナリ  
・りく橋 農中 張見人よ多良の院スアトトヤ鳥ハ鳴音にナリ  
・吉田長 農業 善名 日  
・さこのみづ橋 農業 善名 日

月

・さく物 駒との板・せらの松原波 駒名 大橋の波

・浅山 日名 四上山 日 川里 中道

・美奈 日 桜の板も若じとけ成より美奈五郎人とのさく門 無房  
・元作 姿 名 すくは橋 名 かわまきの姿の板のさく門もむらむらのせせらをは



